

昨年好評だった高村光雲作の木彫「うずめのみこと 鈿女命」を再び公開します。



光雲の鈿女命

受け継がれた「形」

第二弾

高村光太郎の父

うずめのみこと

高村光雲作 木彫「鈿女命」

2022年

2・23

水祝



5・15

日

関連行事

高村光太郎記念館講座

ギャラリートーク「光雲と東雲の彫刻(仮)」

講師：小山弘明 高村光太郎連翹忌運営委員会代表

令和4年3月6日(日)10:00～12:00

《申込》市内在住あるいは勤務の方 定員15名(抽選)

※お電話にてお申し込みください。 ☎0198-28-3012

開館時間

午前8時30分～午後4時30分

高村光太郎記念館 企画展示室

記念館入館料でご覧になれます。

新型コロナウイルスの状況により中止・延期になる場合があります。



高村光雲は、1852年江戸浅草生まれ。初名は、中島光蔵。1863年、12歳で仏師・高村東雲の門弟となり、11年の奉公の末、1874年に独立。「光雲」の雅号を許され、戸籍上の本名とした。同年、師・東雲の姉、悦の養子となり、高村姓となった。翌年に東雲の姪・わかと結婚。5男4女の長男として光太郎が生まれる。

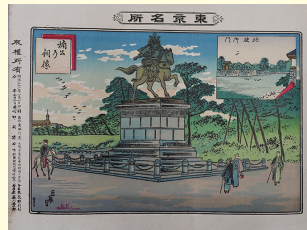
1877年、第二回内国勸業博覧会に師の代作で出品した「白衣観音」が一等龍紋章を受賞、皇居造営に伴う装飾彫刻制作を拝命。1889年、岡倉天心に請われて東京美術学校（現・東京藝術大学）彫刻科に勤務し、翌年には日本初の帝室技芸員となった。皇居前広場の「楠木正成像」、上野公園の「西郷隆盛像」、それぞれの原型制作主任に任ぜられた他、1893年、シカゴ万博に木彫「老猿」を出品し、のち国重要文化財指定（1999年）になるなど活躍の場を広げ、近代彫刻界の礎を築いた。

令和に入ってから新たに寄贈された光太郎や光雲に関する作品等を初公開し、
様々な受け継がれた「形」をご紹介します。



じゆんてい
准胝は、サンスクリット語。
密教では六観音（聖観音・千手観音・馬頭観音・十一面観音・准胝観音・如意輪観音）の一つ。災害除けなどの力があるとされる。

じゆんてい
准胝観音
《高村光雲作》



錦絵 東京名所 楠公乃銅像

光雲は、楠木正成像の馬の製作者である後藤貞行に彫刻は勢いがなくてはいけなから足を曲げるように頼むと「馬はそんな風に曲がらない」と言われ、よく談判していた。光太郎は、「楠公銅像」という詩の中で楠木正成像の木型を明治天皇が天覧になった時、楔を一本打ち忘れたため、剣がぶらぶら揺れて、「それが落ちたら切腹だと父は決心していた」と回想している。



錦絵 東京名所之内 上野公園 西郷銅像附近之景

光太郎は、(談話筆記「回想録」)の中で西郷隆盛像を製作するにあたって、樺山海軍大臣は鹿児島に帰って狩りをしている所がいいと言って曲げないので、その姿に落ち着いたと回想している。原型は、木彫でつくり、二度くらい大きさを変えて作り直しているの、大変手間のかかる作業だった。

他、錦絵5点



高村光太郎から長沼重隆に宛てたハガキ

翻訳家でもある光太郎は、アメリカの詩人ウォルター・ホイットマンの作品『自選日記』を翻訳し、文芸雑誌『白樺』に寄稿していた。英米文学者の長沼重隆がホイットマンの詩集『草の葉』を翻訳した際、光太郎から長沼に宛てたハガキ。



看板

エキエキ、イクイク
或或 《光太郎の書》



コート掛け

「或」の字は、引っさげ一本の所が三本になっていて、とうもろこしなどの繁殖した姿のこと。光太郎は、墨痕あざやかに書き、この字を気に入って「本当にとうもろこしが風になびいているようだ」と言っていた。総合花巻病院の前身である花巻共立病院の木造二階建ての寮に使用されていた看板とコート掛け。



高村光太郎記念館

花巻市太田 3-85-1 ☎ 0198-28-3012

※展示品を入れ替える場合があります。